

ご近所の お医者さん

☐
734
☐

くぼたこどもクリニック院長 久保田恵巳さん ー大阪市生野区

小児科医としてありたい姿

今から24年前、ちょうどアメリカ同時多発テロ事件があった直後に主人がスイスに留学することになりました。同時に私も渡航し、スイスで出産・子育てをしました。

当時、すでに小児科専門医の資格も

持っていました。

したので、

小児科医として胸を張

っていいはずでしたが、テロ事件で世界中が不穏な空気で覆われている中、海外での子育てがこんなにも不安で心配なことかと思ひ知りました。そんなタイミングで起きた私の恥ずかし

恥ずかしいエピソード

い出来事を紹介します。長男が1歳半ぐらいの時、彼が大好きだった、BRIOという電車のおもちゃの一つが無くなりました。留学生活の狭いアパートなのに、家中探しても見つかりません。

言。私には「あほちゃうか……」という彼女の心の声も聞こえてきたような。

今、私の外来に当時の私が子どもを連れて来たとしても間違いなく同じことと言いますね。それでも私達は誤飲の不安が払拭できず、翌日にかかりつけ医に行きました。対応してくれたバイトの少し若めのすてきな男性医師が「うーん、僕もあり得ないかなと思うけど、

BRIOのおもちゃ、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、直径が5センチぐらいあり、誤飲チェッカーは絶対に通らない大きさですね。なのに、私達夫婦（夫は脳外科医）は彼が飲み込んでしまったのではないかという不安に襲われました。とても小児科医とは思えない想像力です。そして、不安にあらがいきれず、なんと救急を受診してしまったのです。救急では50歳代ぐらいの女性医師に「あり得ない」と一

お母さんの安心のためにレントゲン撮ろうね！」と。私は神かと思いました。結果はもちろん何も映っておらず、後日、テレビの裏からBRIOは出てきました！

この経験は小児科医としてなんとも恥ずかしいエピソードであると同時に、私の目指すべき小児科医像に今も深く影響しています（あの時の男性医師に近付けているかどうかは別として……）。

